

世界最古の老舗企業が大阪に存在します。四天王寺を建立した、株式会社金剛組という宮大工の企業です。創業は聖徳太子が活躍した飛鳥時代の西暦578年と古く、1430年の時を生きてきました。さらに1000年を超える企業の数も日本は世界一で約1万5千社。小さな商店まで入れると約10万社前後あるといわれています。

老舗起業の共通点を、倫理的な観点から考えてみると、重要な要素の一つに恩意識の深さが上げられるように思われます。

例えば、金地金を扱い、金の売買価格の最新データを提供している田中金属工業は、社歴百二十年で創業当時は両替商でした。質流れになった金のかんざしや、白金を溶解して金地金にして販売することが創業時の生業でしたが、今では携帯電話の着信を知らせる超小型モーターの金属のブラシを手がけたり、金属を配合した制癌剤も開発するなど、金属に関する分野で幅広い展開を見せています。

同社は草創期の苦難に満ちた時代に、安田銀行の創業者・安田善次郎氏に大変助けられたそうです。そのためか、田中金属の特別室には、代々の社長の胸像と並んで安田氏のブロンズ像が置かれています。しかも安田氏の像にだけ座布団が二枚敷かれ、恩義への感謝の心を形に表しているのです。(野村進著『長寿企業は日本にあり』NHK発行参照)

同じように恩意識を継承している企業に、東京東鴨にある創業112年のお茶問屋があります。三代目社長の冠城勲氏は、「私どもは長井さんのお世話により今日があるんです」と語ります。最近のことかと思いきや、明治三十年の初代稲次郎氏の頃に「長井氏」にお



## 恩意識を継承し 心の結びを養う

世話になったといえます。お茶の新鮮さを第一と考へ、誰よりも迅速に運ぶことを実践していた稲次郎氏の熱心さに心打たれ、大八車を連ねて横浜に運ぶ大量の狭山茶を全部買い取ってくれたのが長井利兵衛氏なのです。しかもその人物、池波正太郎の小説『鬼平犯科帳』に登場する人物なのです。

小説では、長井氏が「茶問屋の主人」という設定になっていて、笠屋の女房お富から懐のものを掏られるという話で登場します。その小説の人物が古くからある番付表を調べて実在することがわかりました。初代を信用してくれたことに、三代目の冠城社長は今も感謝の心と尊敬の念を忘れず、「お世話になった」と語ります。

倫理研究所の創始者・丸山敏雄は『万人幸福の栞』の中で、「開店の日のいきこみと、友人のよせられた厚意を忘れるから、少しの困難にも、気をくじかせる。終始一貫ということとは、成功の秘訣であるが、これが出来ないのは、皆本を忘れるからである」(p90~91)とし、終始一貫の秘訣は恩意識にあると述べています。

また、「人は利益に動き、権勢に動き、名誉に動く。しかし、これは根本的性情ではない。最後に動くものは、必ず恩愛の純粹感情によってであった」(『純粹倫理学体系』p239)とも述べます。

え・牧えみこ

人が利害を超えて本当に動くのは、「おかげで助かりました」「今日あるのは、あなたのおかげです」という、純粹な感謝の真心によるのかも知れません。利害を超えた心の結びを優先した、恩意識の深い倫理観を持つ企業が、長く生き残っていくといえるでしょう。